FRONT
OF
VIEW

トマ・ピケティの格差社会と日本

●

第一生命経済研究所　特別顧問
松元　崇

最近話題のトマ・ピケティの『21世紀の資本論』によれば、人々の生活の不平等化が世界の流れだそうである。しかしながら、それとは違う思想がわが国にはある。そのひとつが日本のケインズとも言われる高橋是清が唱えた「経済教」である。高橋が生きた戦前の日本はかなりの不平等社会だったが、江戸時代まではそんなことはなかった。それは、産業の中心が農業だったからである。特に、日本の稲作農業では、みんなの共同作業が大切。水を確保するための用水路の整備だけでなく、田植えもみんなでやった方が効率的だった。それと並んで、一人ひとりが苗代を作り、代掻きをし、田の草取りをして収穫に結びつけた。そのような労働が大切だということを象徴しているのが、日本各地にある秋祭り。それは、豊かな実りをもたらした天候、すなわち神様に感謝すると同時に、みんなが働いて収穫を迎えたことを、みんなで喜ぶ行事である。その基本には、働くことを尊ぶ、自分達の労働を自らほめるという感覚があった。だからその主役は、神様へのお供え物ではなく、みんなで担ぐおみこしになった。働くことを尊いとする伝統が集約したものが日本の秋祭りだった。

ところが明治になり、産業の中心が農業から工業になっていくと、ここに経営者というものが登場してくる。経営者のやり方しだいで、企業は発展もし倒産もするようになる。江戸時代までの農村にも、庄屋さんといった地主がいたが、地主のやり方で、お米が多く獲れたり少なく穫れたりということはなかった。実際に農作業をする農民が、いかにみんなで力を合わせて働くか、また、一人ひとりが働くかが大切だった。それが工業社会になると、経営者のやり方で収益が上がったり損が出たりする。そこに、戦前の日本が不平等社会になっていった基本的な理由があった。

そうなっていった時代に、低金利を通して不平等を解消していこうと考えたのが高橋是清だった。高橋は、十分な資本を背景とする低金利こそが経済発展の基盤と考えていたが、それを晩年には資本の受け取りである金利を労働の受け取りである賃金よりも少なくするのが社会正義にかなっているという道徳観にまで高めた。高橋は、首相までつとめて一旦政界を退いた大正14年の講演で「人生を観るに、人生には二つの教えよりない。いわゆる人道教と経済教というものが平行して進めば、これほど人生に幸福なことはない」とした。「人道教」とは仏教やキリスト教であり、「経済教」とは効率的な生産の実現によって人々の生活を向上させるというものである。そして、世界大恐慌のただなかにあった昭和８年の講演では、働くことこそ人間の最も大切にすべきことだとして「資本が経済の発達に必要欠くべからざるは言うをまたざるところなるも、この資本は労力これに伴ってはじめてその効を奏しうべきものにして、生産界に必要なる順位より言えば、むしろ労力は第１に位し、資本は第２位にあるべきはずである、(中略)。また直接産業に従事する人々の報酬と過去における蓄積を他人に貸し付けてその他人が収受したる所得の一部を徴収する人々の報酬とはこれを同等に見ることができないのである。すなわち直接生産に従事する人々の報酬を厚くするは、これすなわち人の労務を重しとなす所以でありまして、座して衣食するよりは働くに如かずとの観念を社会人心に扶植することが肝要であります」と述べている。ここには、働くことを第一として平等社会を作っていこうとする考え方を見出すことが出来る。それは、秋の収穫をもたらす農作業という労働をみんなで尊び喜ぶというわが国の秋祭りの伝統を踏まえたものだといえよう。

米国では、会社が傾いたときには、外部から来た経営陣がびっくりするほどの高い報酬を得ながら従業員を解雇し賃金をカットするのが当たり前。それに対して日本では、そんなときにまず削減されるのが経営陣の報酬である。稲作農業にはぐくまれた平等社会の伝統を持つ日本が、ピケティーの言うような格差社会になっていくとは思われない。今でも多くの地域で秋祭りが行われているのが日本なのである。